



日本国ではなく、 日本国民の豊かさの再設計

〜昔の農民、武士、軍人の精神の復活を！〜

（後編）

（株）人間と科学の研究所
（株）医工学研究所
所長

飛岡 健

(前号から続く)

(3)日本の歴史からの教訓

少し目を日本の歴史に向けてみよう。私はインドネシアに行つて、インドネシアの要人達と会つた時に言われた事がある。それは「かつてインドネシアを訪れた日本の武士も軍人も、実にその考え方も、態度も、行ないも立派であり、尊敬すべき人物であつた。ところが最近のネクタイを締めたスーツ姿の日本人ビジネスマンに敬意を持たないし、余り来て欲しくない」との内容であつた。

日本の武士も軍人も、そこには忠君愛国の精神があり、ひとりひとりが日本を代表する位の心構えがあつたのだ。ところが第2次世界大戦以降の日本人には、戦争犯罪意識がW G I P (War Guilt Information Program) により強く植え付けられ、ひとりひとりが日本を代表しているのだという意識は毛頭無く、「今だけ金だけ自分だけ」の意識が際立っているのだ。

かつての日本社会においては、武士道があり、軍人精神があり、ひと

りひとりが藩や日本を背負つてゐるとの自覚があり、同時に「恥の文化」が根付いており、武士達は「恥の棲家は死の世界」、「武士道とは死ぬ事と見つけたら」の精神を宿し、ひとりひとりが自立し、高邁(崇高)の精神を鍛えていた。

武士の母親は、14歳で元服して、登城する時、我が子に「主君や藩に一大事のあつた時、親や家族に問題の生じた時、一身を懸けて戦うか、そこに恥が認められる時は、自らの身命を掛けて恥を償いなさい」の言葉を与えたという。そこには「修身齊家治国平天下」の根本的な精神があり、自らの死を持つて戦う「償いの精神」あつたのだ。

そして、戦いの先には死のある事が判つている軍人達は、戦いに行く前に「自分が死ぬとは、どういふことか」を問い、デカンシヨ節(デカルト カント ショーペンハウエルの実存主義哲学者達を学び語る事)を歌い、納得したかどうかは判らないが、実際自らの死へのある程度の覚悟を持つて出陣するのであつた。そしてその中で日本という国の使命を考え、自らの死との関係を模索し、

自分なりの答えを見つめる努力をしていたのであつた。

人間という生き物は「死との対峙」によつて「生の価値や定義」を浮かび上がらせる事が出来る存在である。今日のように、ゲームの画面や、TVの中での「死の光景」を見たり、仮想空間でのデスマッチのみでは、自らの死を自らの生と対比させて考えることはせず、いたずらに死に恐怖を感じるか、簡単に画面上で死を操作してしまつてゐる。

そして「家族の絆」や「社会との連帯」は、3世代家族から親子だけの2世代家族になることによつて、生きていく事のみを学ばせる親子関係になり、時代を継承したり、広く自然や他の世界を覗く機会を喪失し、両親の苦勞している姿をみたり、一部の豊かな経済状態を見て育ち両親共に「エコノミックアニマル」として育たざるを得なくなつてゐる。

お爺さん、お婆さんからの少し距離のある愛情や、親子3代での伝承や伝統の継続が途切れ、まさに根無し草になつてしまつてゐるのが今日の日本の家族と、そこでの生活感情であらう。

(4)コミュニティの崩壊

による精神の貧しさが、
政治の墮落、
経済の低迷を招く

まさに戦後の占領政策のお陰で、日本社会は社会組織と日本人の心身を共に劣化させ、日本の伝統的村落共同体(コミュニティ)を破壊すると共に、日本人ひとりひとりの精神をバラバラにし、「今だけ金だけ自分だけ」の精神を宿らせてしまつた。

そして日本の産官学リーダー達も、独立独立の精神と敬天愛人の思想を共に失い、一部の人間や組織や社会の政治的権力や物質的富の追求のみに走つてしまつてゐる。

そして最も注意すべきは、自らの中に精神的支柱、あるいは原点を失つてゐる為に、自らの考へている事や行つてゐる事が、世界や時代のどの位置にあるのか判らず、右往左往して彷徨つてゐる事である。行先を見失つた流浪者であり、漂流船のようなもので、いずれその消耗な旅に疲れ果てて、臨終を迎えてしまふ

のである。

そこで重要な事は、何よりも自らの中に精神的支柱、原点を定める事である。良いか悪いかの判断はさて置いて、昔の武士には主君と、家族と、祖先とがあり、軍人には愛する家族と、日本国民と、天皇とが自らの精神の支柱として立っていた。ところがそうした日本人の精神を占領政策は、バラバラにし、支柱や原点を散逸させてしまった。それを取り戻すには、どうすれば良いのか。その為に、先ず日本人の中核となる考え方がどのように培われたのかを見てみよう。

(5)日本人の精神の原点は

水田稲作農業にあり

私は日本論、日本人論を長年研究してきた。そして得た結論は「日本人の精神の培われた場所は、里山での水田稲作農業である」との理解に達した。少なくとも第2次世界大戦前までの日本社会の人口構成は、約8割が農民であった。そして歴史を遡ってみると、縄文時代のかなり早くから農耕が開始され、弥生時代に



日本人の精神の原点は水田稲作農業にあり

入り人工的な水田稲作農業の開始により、主食が安定し、人口が増え、そこに荘園経済が発達し、貴族が生まれ、更にその警護、自警団的役割りとして武士階級が生まれた。そして奈良、平安時代までは、貴族が中心となって政治をし、鎌倉時代からは武士が、公家を立てながらも政治の実権を握り、日本を動かしてきた。しかし、公家、貴族、武士も元を正せば全て農民である。それ故、まさに日本人のものの捉え方、考え方のベースは水田稲作農業をしていた農民が農業の中で培った精神である

という事が言えるのである。その農民は運命共同体（コミュニティ）としての山村での共同生活であり、何よりも村落単位での農作業、即ち全員での用水路造りと管理、そして春には共同での田植え、そして秋には豊饒の時は、村をあげての感謝祭を秋祭りとして催すのであった。まさに村は大家族であり、ある意味で語らずとも「以心伝心」であり、「阿吽の呼吸」で、お互いの様子が手に取るように判る程であり、お互いに思い遣って互恵の下に暮らしていた。そこでは「沈黙は値千金」であり、生活の糧は「人事を尽くして、天命を待つ」の如くのスタイルであり、政（まつりごと）は「お日様、お天道様頼り」である。その為に祈願等を行ない、五穀豊穡の美りの秋を迎えられた時は、夜を徹して感謝祭（秋祭り）して催すと言った生活であった。

そこで培われた共同意識や、祖先崇拜や自然崇拜は、個々人としても家族としても、村落共同体としても信心深く行なわれていた。そしてその上に天皇が存在し、国家の中心と

して恭順の意を国民は持っていた。そうした水田稲作農業を中心に据えた生活の中で、日本人は神道を作り上げ、入ってきた仏教を聖徳太子の神仏の習合により、巧みに融合させると共に、儒教を国家の運営の為の考え方として採用し、まさに「修身齐家治国平天下」を深く学ばせたのであった。特に武士階級においては厳しく、この教えが刷り込まれた。元々の「お天道様思想」とそうした外来思想とが一緒になり、日本の天皇を中心とした国家の一元的統合的支配の図式が出来上がり、少なくとも第2次世界大戦まで続いたのであった。

特に海外からの文明、文化を男の時代（奈良、鎌倉、安土桃山、明治、昭和）に巧みに取入れ、それを次の女の時代（平安、室町、江戸、大正）に日本的に発酵させ、発展を遂げて来ていたのであった。

まさに底辺には、水田稲作農業の中で培われた精神文化が深く根差していたのである。

ところが明治維新からの脱亜入欧による西洋科学技術文明の取り込みと、日本のプロセスエンジニアリン

グの巧みさで、巧みに発酵させ、それらをより日本的に独自のモノとして発展させてきた。ある面で本家本元の欧米よりも過剰に文明化を進めてきたのである。

そして過剰とも言える文明化が進み、今日では全ての文明頼りの生活を送っている。

しかし、日本人の日々の生活を支配して、村落毎に存在していた神社は、明治政府の神仏の分離政策により、神道は「国家神道」にされ、仏教は葬式仏教になり下がる方向に舵を取らされた。

ところが西欧科学技術文明の裏にあったキリスト教文化の代替えとして神道を入れ込む筈であったが、必ずしも馴染まずに、文明、文化とは分離されたままで、日本人は西欧科学技術文明の方に魅せられ、物質文明化し、エコノミックアニマル化されていく事になってしまった。

それに伴い日本人の心は次第に自然崇拜と祖先崇拜の念を薄れる方向に、それも過剰に向かい始めてしまった。

しかし、それでも第2次世界大戦までの間に大きく崩れる事は無かつ

た。だが、第2次世界大戦に敗け、それまでの日本人の考え方や社会システムの多くが否定され、戦後責任を被され、贖罪意識を強く持たされ、アメリカの物質文明に敗れたとの認識は、日本人の心を大きく科学技術、物質重視の方向に変えさせてしまった。

3S政策の影響もあり、日本人は単純にアメリカ的生活様式に憧れ、物質的生活を必死で追い求めるようになり、日本文化を置いてきぼりにするようになったのであった。

その結果が、前述の如く祖先崇拜、自然崇拜を弱め「金だけ金だけ自分だけ」の考え方になってしまった。

そして「金だけ 金だけ 自分だけ」の人間としての、あるいは社会としての原点、基盤を喪失した状態を作り出してしまっている。その事すら気付かないのが今日の日本人であり、欧米を支配する思想と文明と、それを動かす人々に隷属させられてしまっているのが日本社会である。

(6)もういちど、

半農半専門の生活を取り戻そう

私は、上記の日本人の精神の墮落と、今日の食料自給率38%（実際は10%台）、エネルギー自給率12%、国防のアメリカ依存を考え、アメリカの「G A F A」や時代の大転換を考えると、何よりも、日本人は今いちど、水田稲作農業を大事にした農業に従事し、もう一方で自分の専門に同時に従事する生活を採用し、コミュニティを再建し、「微農制」を実施し、かつての日本人が強く宿していた自然崇拜、祖先崇拜、そして日本の支柱としての天皇制の再興が必要と考えるのである。

そうした生活を取り戻すことによつて、日本社会はもういちどしっかりと国家を作り上げ、再建の道を歩めると考えるのである。しっかりとした地方が新たに創成されるのである。今のように地方を衰退している状況の下で、中央が頑強なシステムの構築は出来ないのだ。

それでは、今の石破内閣の掲げる地方創成は、そうした考えに沿っているかという点、どうも地方にいかにかに予算を回すかという配慮のみで、本当に地方で人々が豊かに人生を遅れる方策を、その政策の内容が持つ

ていないのではなからうか？

(7)日本国民を豊かにするには

仮に地方がしっかりと創成し、中央政府がしっかりとすれば、今の日本には、100兆円規模の予算の他に、300〜400兆円の特別会計があるし、世界的に見ても十分な資産がある今の役人互助組合的な政府の下部組織を整理し、予算の中のメンテナンスコストを大幅に下げ、未来投資を増やすと共に、庶民の生活を豊かにするべく予算を使えば、少なくとも今のままの変量体制のままでもかなり庶民の懐は豊かになる筈である。

その為にも、真の行政改革が不可欠であるし、役人の質を変えねばならないし、政治家も同じである。今回の兵庫県の斎藤元彦知事の再当選におけるSNSの効果は、先の都知事選の石丸伸二候補の選挙、そして国民党の玉木雄一郎氏のSNS活用の選挙での効果を見ると、そしてトランプ大統領のXでの姿を見ると、日本の政治もSNSによって大きく変わっていくものと考えられる。社会の透明化が進み、それに

つれて真実を国民が知るようになり、自らの意見をSNSで反映させるようになっていくだろう。

(8) いよいよ社会変革を

大衆が出来る時代に

〜兵庫県知事選に

斎藤元彦氏の当選〜

そこでもう少し詳しく、SNSのこれから来る大変革の時代の中での存在意識と価値を見てみよう。

県会議員が全員県会議で、知事の辞任要求投票をした結果、兵庫県知事斎藤元彦氏が辞任して、再立候補して県民にその是非を問う選挙が、2024年11月17日に行われた。その結果は、どの政党からも支持されず、選挙カーも街頭車も無い中で、ひとり孤軍奮闘して街頭に立ち、戦った斎藤元彦氏が、まさに県民の多くが兵として敢に隠れていたかの如くに、斎藤元彦氏の任期中の県政の裏の出来事をSNS上で知り、国旗を翻した。そこには白日の下に、現在の県行政の姿の真実を露した人物がいた(本人は自分ではない)。それがSNSで怒涛の如く拡がり、

草莽崛起が生じた。マスメディアが伝えない真実をSNS上で県民が知ったのである。その事に対し、県の行政マンの中には、アンチ斎藤派もかなりいるが、それらの人々は今までの行政の微温湯に浸かって安穩に仕事をしていた(?)人が多いようだ。もち論、それなりに真面目である。しかし、そのこと自体が体制に呑み込まれてしまっていたのであった。

実は、今までのものづくり行政の名残りが、兵庫県政でも続いており、1000兆円の県庁の建設を計画していたとの事である。しかし、箱物行政の今までの県政では、そこに果喰う人物が多く、予算を増しさせ、暴利をむさぼる人達が多く、本当に必要なところ、例えば教育や、子育ての支援への予算は十分ではなく、多くの予算が箱物を中心とする枠組みの中で消費されていた。ところが斎藤県政では、県民の声を聞き、壊れていたトイレやプールの修理を始め、県民ひとりひとりの生活へ資金を振り分けてきたとの事である。そして60億しか無かった予備費を自分の給料までつぎ込んで160億まで

貯めていた。それに対して、県会議員、市会議員、そして県の予算に群がる業者は、アンチ斎藤になり、追いつけぬが捏造された。ところが事実は別で、県の幹部の多くがセクハラをしていたのであった。それがSNSで暴露され、11月17日の選挙結果になった。

そして、アンチ斎藤の動きをした22人の市長に対し、兵庫県民は、アンチとなり、次の選挙で落とす運動を始めようとしている。

(9) 実は、既に色々なところで

SNS選挙が

私は今から30年以上前に、初代のNTTデータ社長の藤田史郎氏と共著で、『生命体経営学』を記し、その中で、透明化社会の到来を告げ、

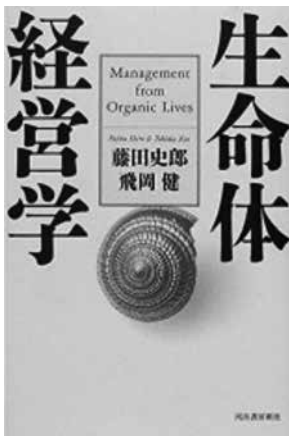
社会の隅々までが透明化し、秘密の保持が難しい社会が到来する事を指摘した。最近の一連の選挙活動の中で、その事が証明されている。

その事に関しては、また別に詳しく述べよう。

ここで重要な事は益々、SNS(Social Networking Service)の重要性が増していくと共に、社会の中の秘密の保持が難しく、透明化がより一層進むことになる事の認識である。良い面も悪い面もある。

一方で、秘密が暴露されると同時に、興味本位の情報がSNSによって拡散され、その拡がりによって、事実でない情報が大衆の間で市民権を得て、あたかもその意見が正しいの如き錯覚が生まれてしまう事も悪しき側面である。

ところで社会の大きな変革は通信技術の新たな発明によるケースが多い。麻から綿に代わる事によって旗が作られ、それによって戦いが大き



『生命体経営学』
藤田史郎、飛岡健共著
河出書房新書

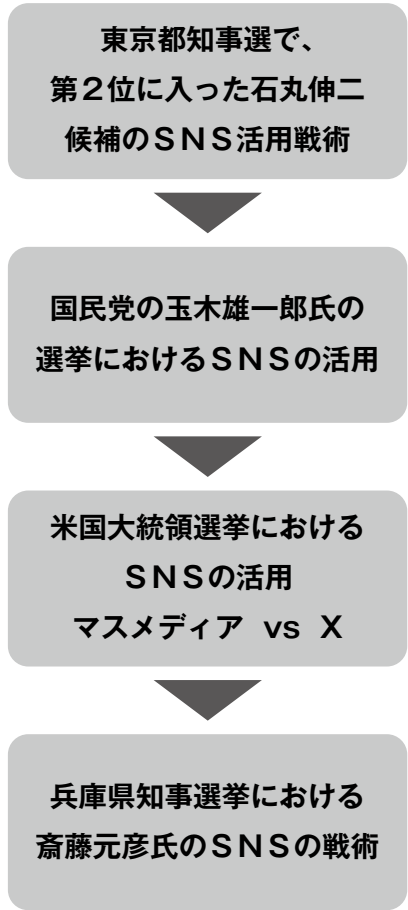


図1

日本人の中での権力と富の再配分が生じるようになるであろう。そうした状況を加速し、確実にする為にも、ひとりひとりの日本人が、その方向で努力する事である。頑張れ日本人！明日の良き日本の為に。

日本人の中での権力と富の再配分が生じるようになるであろう。そうした状況を加速し、確実にする為にも、ひとりひとりの日本人が、その方向で努力する事である。頑張れ日本人！明日の良き日本の為に。

し、「徴農制」を行い、農業の自立を図り、地方で生まれた人は、その地方の為に、かつての藩のように尽力し、その地方ごとの経済の社会と、そこでの文化を育てるように政治を行うようにすべきである。

その地方政治もSNSを用いて、ネット投票を可能にし、直接選挙、あるいは住民の直接の参加の真のデモクラシーを構築していく形にする事である。それらが全て出来る基盤が整いつつあるのが今日である。もういちど廢臍置藩を逆に行い、地方を活性化して、日本合衆国にする事である。

〈おわりに〉
日本国民を豊かにしよう。
その為には

その為にも、日本人が再び、自立への意識を取り戻し、かつての侍や武士の如く、死を賭けて生を全うする精神を涵養し、未来の子孫達のために頑張る事である。

今の日本は決して糖尿病になっていない。手術可能な状態である。

しかし国民ひとりひとりが、その気にならない限り、今の衰退の傾向は避けられないのだ。選択するのは国民ひとりひとりなのだ！将来に幸ある選択を国民がする事を願う次第である。

く変わったことが知られている。麻ではスマが滲んで字が書けなかったが、綿だと書けるようになったのである。

またプロテスタント革命において、活版印刷機の登場によって、マルチン・ルターは、自分のカソリック批判の考えを大量に印刷する事が出来、カソリック教会の悪事を印刷したコピーを人々に配る事が出来る事になった。その事によって宗教改革は成功したのであった。

そして今日のIT革命により、在宅での仕事が出来ると共に、多くの人々は、ローカルメディアの主人公、所有者になり、放送局、新聞社、出版社の役割りを果たす事が出来るよう

なっている。その一部が最近の選挙事情を変え、お金が無くとも、地位が無くとも、権力が無くとも、自らの主張を伝えられるようになってきているのである。

そうしたSNSの活用により、今日の一部の人間のみの権力と富を握るような状況は、地下に秘められている状況から透明化社会の中で確実に明らかにされ、国民大衆の民主的な意見により、その体制が徐々に変えられていき、真の正義感と能力と愛情を持った人間が社会の中心に座れるような時代が徐々に来つつあるのだ。

それにつれて不平等は解消され、

日本という国は、GDPは世界比の中で、かつては18%あったが、今日4%まで低下し、国際社会の中で地位を低下させている。そこには円安、そして1%以下のGDPの成長等々あるが、多くの国民のフトコロは決して温かくない。

何とか国家ではなく、国民のフトコロをもっと豊かにする政策が日本には必要である。その為には、今の中央集権制の政治を、地方政府に移